

横行八足

——岩嶽丸のこと——

齋 藤 真麻理

要 旨 西尾市岩瀬文庫に所蔵される御伽草子『岩竹』については、酒吞童子や土蜘蛛など、先行の武勇伝をはじめ、『塵
滴問答』との密接な関連が指摘されている。従来、これら以外に類似する説話は報告されていないが、『岩竹』と酷似する
怪異譚が那須地方に語り伝えられている。本稿では、この新たな岩竹説話の存在を指摘するとともに、両者の成立した背景
と物語世界について考察する。

小足八足 大足二足 我見て如何

払子が云く 蟹ではなひか

(蟹払子図)

白隠筆と伝える「蟹払子図」は画面左に蟹、右に払子を配する。払子の長い毛は大きくうねりながら左へ流れ、毛先の上に一匹の蟹が描かれる。あたかも蟹は、行く手を急流に遮られているかのように見える。この絵は民間伝承「蟹問答」を、さらには狂言「蟹山伏」を想起させる。⁽¹⁾「蟹問答」では例外なく蟹は打ち負かされるのであるが、狂言の山伏は蟹退治に失敗してしまう。

「蟹山伏」の最古の台本は天正狂言本に溯る。曲名は「蟹ばけもの」、主人公は旅人二人、いまだ山伏物には仕立てられていないが、「様々の仕舞」は今も人々の笑いを誘う趣向である。⁽²⁾

かにはけ物

一、旅人二人出て行か、日暮てたふにとまる。らんしやうにてはけ物出る。鬼来て、大そく二そく、小そく八そく、りやうかん天をさす、一こう地にふす時、いかん。へかに。たそ。からめんとてさう方よりねりよる。さまくのし舞。後二人のみ、をはさみて引入。とめ。

(天正狂言本「かにはけ物」)

この曲の主人公が山伏となるのは、寛永十九年(一六四二)の大蔵虎明本「かに山ぶし」まで待たねばならない。ここに至ってはじめて、「大ミね、葛城、熊野山を仕りたる。かけ出の客僧」が登場し、強力を連れて本国に帰る帰途、「おそろしひ物」に出くわす。

天に二がんあり、一こう地におちず、あふ、大そく二足にして、小足八そく、うぎやうさぎやうして心をなくさむもの、せいなり、

(大蔵虎明本「かに山ぶし」)

「う、さてハ汝ハかにのせいにてあるよな」、山伏は正体を言い当てるものの、蟹は一向にひるまない。「きやくそうのあまりに行力をまんじ給ふほどに、ぎやうりきのほどを見たためあらハれ出て候」、蟹に耳を挟まれた強力は助けを求めるが、祈禱空しく、ついには山伏までもしたたかに耳を挟まれ、強力ともども楽屋へ引き込まれてゆく。

虎明本は蟹の出現した場所を明言していないが、続く虎寛本では「江州蟹が澤」となっている。時代が下るにつれ、蟹の出る場所が具体化してゆく。

大きな澤へ出たが、是は何といふ澤じや。

されば何と申澤で御座るか覚へませぬ。

是は定て江州蟹が澤で有う。

誠に蟹が澤で御座らう。

ハア、何とやら空が曇て山が鳴る様な。

誠に山が鳴る様に御座る。

此様な所に長居は無用。急でさと近くへ行う。

(虎寛本「かにやまぶし」)

虎光本、山本東本もこれに同じ、「橋の下の菖蒲」云々の呪文も験なく、蟹に散々痛めつけられてしまう。鷲賢通本では、山伏たちは老の坂付近、酒吞童子説話にゆかりの場所で蟹に出会う。

日高くは老の坂までささうぞ。

心得ましてござる。

いやこれはしん／＼とした澤邊へ來たは。

まことにこれは淋しい澤邊へ參つてござる。(中略)

やい。これは合點の行かぬ物ぢやなあ。

まことに興有つた物でござる。

まづ言葉をかけて見よう。

(鶯賢通本「蟹山伏」)

山口鶯流の「蟹山伏」では、「蟹が坂」が舞台である。⁽³⁾

爰ハどこじや。

鈴か峠とも亦ハ蟹か坂トモ申増る。

蟹か坂ト云ふハ子細か有か。

中々いわれこそ御座れ。古しへ此処ニ大きな蟹か住て人を取たと申増る。恐敷事でハ御さらぬか。

誠ニおそろしい事じや。(中略)

ヤイ／＼夫レへ出たハ蟹で有ふがそふでハないか。

中々人輪はなれたほらに年久敷住蟹の情じや。^(ママ)

(山口鶯流「蟹山伏」)

「蟹が坂」とは『東海道名所記』所載の説話に基づいた設定であらう。

○蟹が石塔は、左のかたにあり。松二本うへたり。むかし、此所に妖怪ありて、往來の人をなやまし侍り。あるとき、会解僧一人、爰をとをりけるに、かの妖怪出たり。僧すなはち問ていはく、「なんぢはなにものぞ。名のれ、きかん」といふ。ばけもの、こたへていはく、「両手空をさし、双眼天に麗り、八足横行してたのし

む者なり」といふ。僧、すなはち、さとりていはく、「横行はよこにゆくとよめり。双眼天に麗るもの、両手空をさし、八足にしてよこにゆかば、汝はさだめて、蟹にあらざるや」といはれて、すがたをあらはしつゝ、戒をさづかり、ながくわざはひをいたさざりけり。そのしるしとて、今に石塔あり。〔東海道名所記〕五

蟹が坂の石塔は、化物退治で名高い田村伝説を伝える鈴鹿峠、田村堂のごく近くにあった。よほど著名であつたらしく、元禄五年（一六九二）刊『俳諧小傘』は、「石塔」の付合語として、「薄原 化物 寺町 人切場」等と共に「蟹坂」を挙げてゐる。

禅問答を連想させる謎かけに配するに、会下僧はいかにも相應しい。「横行」は横様に行くこと、また気まま勝手に歩き回り、恣に蔓延ること、言葉遊びの妙も手伝つて、人口に膾炙したものであろう。

二、

化け蟹退治を成し遂げた英雄は、室町物語の中にも登場する。

西尾市岩瀬文庫蔵『岩竹』は江戸前期写、横型の奈良絵本二冊、石川透監修『岩瀬文庫蔵 奈良絵本・絵巻 解題図録』（二〇〇七年八月）にも紹介がある。まずはその梗概を追ってみよう。

仁王二十一代の帝、垂仁天皇の時代、都は難波にあつた。その皇子が位を譲り受けて用明天皇となられ、都は奈良に遷り、大仏殿が建立された。用明天皇には心にかなう妃はなかつた。

その頃、高倉中納言夫婦が春日明神に申し子をし、姫を授かつた。絶世の美人に成長した姫は、帝から入内を求められる。

入内当日、用明三年二月七日、姫の車が二町ほど進んだかと思うと、突然、大嵐となり、恐ろしい雷が鳴り響いた。九つのいかづちが現われ、そのうち一つが姫を奪い取り、虚空を指して消え失せた。残る八つのいかづちも、それぞれ女房を奪い去った。

怪奇は立て続けに起こった。二月十五日、大仏が血涙を流すという不思議が出来、巷には「これは国土の悪事に成べし」「万民のもつけになるべし」と風聞が乱れ飛んだ。幸いにも一件は比叡山の阿闍梨の護摩で収束し、阿闍梨は事の次第を書き留めて「用明三年二月廿日」と奥に記し、叡山の宝とした。

二月廿七日の夜半には、内裏へ変化のものが忍び入った。一旦は帝に退けられたが、翌晩再び、八大竜王もかくやと思われる化け物が姿を現す。その時、颯爽と座を立ち、化物に切りつけたのは右京大臣であった。⁽⁵⁾ 化物は右京大臣を掴んで天上しようとして果たさず、逃走した。

化け物の正体を博士に占わせると、「西海に年月久しく住みなれし岩蟹」が、大仏建立の際、秘蔵の子蟹が柱の下敷きとなって殺されたのを恨み、「吉野山のあなたなる、いばらだにといふ所」から内裏へやって来るのだという。直ちに岩蟹討伐の勅命が下った。討手には五人の勇者「中綱、竹口、かねたか、のふいへ、よしひろ」が選ばれた。一行が山中を捜し求めていると、老人が現われて岩蟹の居場所を教えた。老人は自分は「この山に住まひせし、そうわう権現」だと名乗って姿を消す（以上、上冊）。

教えのままに進んでゆくと、姫君と共にさらわれた侍女に出会い、化け物の様子を聞くことができた。討手の面々は首尾よく姫君達を救い出し、化け蟹の潜む洞穴の入口で耳を澄ませた。

ついに、岩竹が現われる。

我らがいにしへは、伊勢と近江の境成、たかかにか峠にいたりしが、これより筑紫西海に年月久しく住みけるが、

御門へ恨むる子細あるにより、このごろこれに來りてあり、(中略) まなこを見れば、日月の山より出ることくなり、手足は八つありて、そのたけ五尺余りなり、おそろしきとも中く何にたとへん方もなし、(『岩竹』) 竹口が二尺七寸の名刀「大竹丸」で切りつけると、岩竹も四尺余りのはさみを振り立てて応戦し、岩をつかんで投げつける。すかさず中綱が進み出て矢を放った。矢は見事に岩竹の胸元を射抜く。岩竹はよしひろによって名刀大竹丸で首を落とされるが、首は空中に飛び上がり、兜にむずと齧り付いた。打ち落としても離れないため、そのまま、都へ持ち帰ることになった。胴体はずんずんに切り捨てられた。

勇者たちがしばし休息していると、突然、空に太陽が九つ出現した。一同は急ぎ岩竹の首を携えて帰京し、帝に顛末を奏上した。博士の占により、太陽は破獄を企てた岩竹の眷属が化したものと判明し、偽りの太陽を射落とすことになる。諸国から選び出された弓の名手八名は、武蔵野でこれらを射落とした。帝も綱代車でお出かけになったが、美濃国の車返して車を返した。そのため、この土地を車返しと呼ぶ。⁽⁶⁾

偽りの太陽は筑紫日向に落ち、八人の射手には坂東八ヶ国が与えられた。太陽の正体は一丈五尺の鳥であった。頭にある玉には仏の姿があり、一つは帝の宝物とされ、残りはそれぞれ霊社仏閣に収められた。

『岩竹』はこのあと姫君の入内を語り、

是を御らんずる人々は、かりそめに女房よびける共、用心してよび候へと、昔もかやうの大事ありけるかと、思ひ出せよ、人くくや 南無阿弥陀仏く

(『岩竹』)

と結んでいる。

『岩竹』には早く市古貞次氏が注目された。⁽⁷⁾氏は、蟹の怪異談は我が国の文学作品には極めて稀であるとし、『東海道名所記』『蟹が坂』の記載と、『岩竹』の「伊勢とあふみのさかひ成たかかにながうげにいたりしが」という言

葉から、こうした口碑と酒吞童子談との結着を推測されている。併せて、本作品には酒吞童子談、辰橋伝説や牛鬼伝説、土蜘蛛伝説、『田村の草子』の影響が見られること、九日並出の記事は寛永九年板『塵滴問答』と酷似する点などを指摘された。『塵滴問答』と『岩竹』との関連性については、近年、鈴木元氏も検証されたところである。⁸⁾

『塵滴問答』の本文は、渡辺守邦氏の説かれるように極めて多様な展開を見せるが、⁹⁾『岩竹』との関係が指摘されたのは、同書「のぼりはしの由来」の項である。これは古活字版以降の版本に記載された九つの日輪出現譚であって、古写本『塵滴問答』には見えない。古活字版は、時代設定のほか、「もつけ」とはぬものはなし」などという表現や、日輪が「地上十八町」の位置にある等々の言も『岩竹』に合致している。

仁王十一代の御門すいにん天王の御とき、日りん九ついで給ひて候、しかればんかの悪事なるべしとてはかせをめされ、御とひありければ、相人申やう、是こそわが朝の仏法王ほうのいとくをあらはさんためと見え候、たとへば、きたのはづれなる日輪は日にて候、それより南にならひたる八つは、みな、からすにて候べし、此からすは地より十八町上に有べし、くつきやうのいてをもつていさせられ候べし、しからずは、天下のもつけになるべしと申ける、
(国文学研究資料館蔵古活字版『塵滴問答』)

むかし、仁王二十一代の御かとをすいにんてんわうと申成か、このみかどの御時は、なんはの京にておはします、(中略) 日りん九つ出させ給ふを見るよりも、なにとるしさひにてあるやらん、さてもふしぎのしたひかな、國々さいくゝのたみ百姓にいたるまで、もつけといわぬものはなし、(中略) 岩竹がけんぞく八人ありけるが、うろくづの苦を逃れずとなりて候が、(中略) 岩竹討たれたるよしを聞くよりも、破獄せんとたくみつ、日りんと変じける、下より十八町上にてある間、ゆみの上手をあつめたまひ、いちくゝにいさせらるゝものならば然るべしと、ことこまかにうらなひて、はかせは宿へ帰りける、
(『岩竹』)

続けて「塵滴問答」は「すいにん十八年二月十日たつの時」に各射手が梯子に登ったとし、梯子段の寸法や組み様を詳細に記載する。『岩竹』の描写は極めて簡略である。しかし、両書とも日輪を射落とす舞台に「武蔵野」を選び、射手が「大中黒の征矢」を放つ。

十六ちやうのたなに上りたるいて、(中略) 大中くろのそやを取て、からりとうちつがひ、よつびきしめてはなしたり、神へんふつりきなればなどかあたらであるべき、北のかたより二はんめの日りにした、かにあれば、やまとかわちのさかひなる、こんごうせんにおちにけり、(中略) 其日、筑紫のひうかの國におちにけり、それにより、ひうかとハ、日にむかふと書く也、
(「塵滴問答」)

大中くろのそやをもちとつて、からとつがひつ、かなくりはなちに、かつきとはなつ、みなみのはしの日りにした、かにたつよりはやくおちにける、(中略) みなく筑紫にきこへたる日向のたへ落ちにける、
(「岩竹」)

日輪の正体は一丈五尺の巨大な鳥であり、日向から帝のもとへ送られた。

そのときはなんのはの京なれば、御門も二月つごもりに、八つの日りんをめしほせられければ、たけ一ちやう五尺のからす也、尾羽は一ちやう六尺、はしは三尺一寸なり、さて、其からすをことく首を切らせて見たまへば、二寸四はうの玉、一づ、あり、その中に、一寸六分の釈迦佛一躰づ、あり、(後略) (「塵滴問答」)
ひうかの國の国司、落ちし日りんを何なるらんとみみ給へは、壹丈五しやくのからすなり、(中略) 八つのからすをふねに積み入れて、津の國、天王寺の北へあげ、此よし御かどへ奏聞す、(中略) あたまをわけて見たまへば四寸四方のたまあり、たまの中にはほとけあり、
(「岩竹」)

この挿話は「又八つの鳥のしかいをば、天王寺の北なる玉つくりといふ所に、地の下四町そこにうづまれたり、

京の町からすまると申は、その塚をかたどる也」(『塵滴問答』)、「てんわうじの北に聞こへたるたまつくりと申は、爰にて玉をとるゆへにたまつくりとは申なり、此からすのしかひをば、からす丸にとをりの四町そこうづむゆへに、いまをき、からす丸とし也」(『岩竹』)と語り収められる。

両者を比較すると、従来指摘された以外にも、『塵滴問答』の細かな表現や設定が『岩竹』本文に活用されているように思われる。例えば、『塵滴問答』では、最初に射落とされた日輪は「大和河内のさかひなる金剛山」に落ちた。金剛山といえは金剛山転法輪寺のある霊峰、玉石を磨く際に用いる金剛砂の名産地でもある(『雍州府志』六ほか)。『譬喩尽』にも「金剛砂 和州金剛山ヨリ出ル砂也 尖ク角アルヲ細末ニ備也 鋸ニ塗テ石ヲ切ニ心ノ儘也」と見えるなど、金剛山は玉造と関係深い土地であった。『塵滴問答』の日輪説話は、玉造や玉に関する説話としても捉えることができよう。

他方、『岩竹』の姫君は春日明神から「こんかうるり」を賜わると夢に見て授かり、瑠璃をのべたように美しいために「こん女」と名付けられた。この背景には、『塵滴問答』に見える「金剛山」からの連想が働いているのではないか。

抑も岩竹は、最初は筑紫西海にいたと名乗っていたが、わざわざ「筑紫」という場所が選ばれたのも、日輪が落ちた「筑紫日向」(『塵滴問答』)と無縁ではないと思う。

さらに目を引くのは、『塵滴問答』も『岩竹』もすべての事件は二月に集中して起こっていることである。『塵滴問答』では「二月十日」に日輪射撃、「二月つごもり」には日輪が都へ送られた。『岩竹』に明記された日付を追うと、姫君略奪が二月七日、大仏血涙が二月十五日、比叡山の阿闍梨の記録が二月二十日、内裏への変化侵入が二月二十七日。そのあとは日付を明記せずに日輪が射落とされるが、物語の口吻からしてさほど時間が隔たっている印

象は受けない。⁽¹⁰⁾

成立時期が近接する『塵滴問答』と『岩竹』、軽々にその影響関係の前後を論ずることは難しい。しかし、細部を検討してみると、『岩竹』の本文には版本系『塵滴問答』の濃い影が見出せるように思う。『岩竹』作者の座右に『塵滴問答』があったか、少なくとも源を同じくする資料があった可能性は極めて高い。

『岩竹』には、市古氏が指摘された通り、先行の武勇伝も縦横に取り込まれた。その一例に『土蜘蛛の草紙』が挙げられる。内裏に忍び込んだ化生が痛手を負うくだりは、まさに土蜘蛛説話を想起させる。

慶応義塾図書館蔵『土ぐも』は絵巻二軸、頼光が田村丸秘蔵の靈剣を授かった話や、養由秘蔵の鎬矢を賜わった話などに続けて、以下のような土蜘蛛退治が綴られる。

ある時、病床に伏している頼光が「心得たり」とおびえた声をあげた。四天王が御前に駆けつけると、太刀を抜いた頼光が「丈七尺の色黒き法師が枕上に立ち寄り、縄で自分をまとおうとしたので、切りつけたのだ」と言う。血の跡を辿ると、大和国葛城山の麓に至った。岩屋から「物のによぶ声」が聞こえて来る。これこそ土蜘蛛であった。東京国立博物館蔵本『土蜘蛛草紙』では、源頼光が綱と二人、異類異形の集る「古き家」を訪れる。頼光に切りつけられた化生は姿を消したが、白い血のあとを辿ると、やはり穴の中で土蜘蛛が苦しんでいた。

案ずるに、蜘蛛は衣通姫の名歌や吉備大臣の説話に見るごとく事の子兆を教える存在であり、引いては吉凶を伝え得る靈力が信じられるようになってゆく。また、枕詞の「ささがに」は、「くも」「く」に掛かり、小さな蟹をも指す。蜘蛛と蟹との距離は大変近い。だからこそ、『精進魚類物語』に登場する「蟹」は、「陰陽のかみ」という擬人名を奉られたのであろう。⁽¹¹⁾ 土蜘蛛説話の要素は、化け蟹『岩竹』の物語にも躊躇なく取り入れることができたはずである。

『岩竹』は、いわば先行の武勇説話の綴れ織りのような室町物語であった。現在、市古氏が指摘された文献のほか、本作と近似する例は報告されていない。

しかし、かつて坂東の山中には、その名も「岩嶽丸」と称する蟹の化け物が巢食い、人々を恐怖に陥れていた。それは火の山、那須の地に今も語り伝えられている。

三、

八溝山塊は栃木・茨城・福島の県境に位置する。主峯の八溝山は約一〇二二・二米、鬼ヶ嶺、大笹山、高笹山、大神宮山、天狗岩、見張山などの山々が連なる。八溝は黄金を産する山であると同時に修験の地であり、坂東観音霊場としても知られた。¹²⁾

八溝山にまつわる化け蟹岩嶽丸の説話は、『岩竹』と同時代の資料、延宝四年（一六七六）の序文を持つ『那須記』に書き留められている。本書は那須一族を中心として那須の歴史を綴った軍記、著者は同郡馬頭町大字小口、字梅ヶ平の好学の士、大金重貞である。大金家は清和天皇の皇子貞純親王の末と伝え、代々庄屋を勤めていた。重貞は好学の士として知られ、ほかに『裸物語』などの著書を残している。天和三年（一六八三）には那須国造碑を発見、元禄四年（一六九二）には徳川光圀の命を受け、堂宇を造営して該碑を安置し、保存に努めた。正徳三年（一七一三）没。『那須記』は徳川光圀に献上されたという（『増補那須郡誌』第四章人物「一〇、大金重貞」）。¹³⁾

『那須記』は大金重貞の代表作ともいえるべき大著であり、昭和五十一年刊『栃木県史』史料編・中世五に自筆草稿本全十五巻が翻刻されている。重貞の孫行光による書き入れ「清書仕候而宜敷仕立申候書ハ水戸表江借シ失候、本

書計残り申候」(卷二前見返し)、「此那須記ハ祖父大金重貞作之、依之水戸御國主様江御上覽ニ入、御寫シ取被為遊候、其外那須中領主方江御用立、御寫取被遊候本書也」(卷四前見返し)等があり、水戸光圀に献上した清書本があったことを知る。『栃木県史』解題によれば、現在その所在は不明であり、また、県内に散見する写本は領主の家々に関する記事の抄出らしく、項目は相当削られているという。

国文学研究資料館蔵マイクロフィルムの中には、水戸彰考館に所蔵される『那須記』全十五巻の写本がある。⁽¹³⁾今はこの彰考館本によって「岩嶽丸」説話を紹介しておこう。『那須記』巻之一冒頭、「藤権守始那須領地頭職之事」に那須一族の濫觴が語られるが、それはまさしく化け蟹「岩嶽丸」討伐の武勇伝であった。

下野国那須の須藤家は、「藤ノ権守貞信卿」という。源左馬頭義朝の郎等であり、武威は諸国に鳴り響いていた。その頃、下野国と陸奥白河郡の境に位置する八溝山に恐ろしい鬼神が住み着き、近隣の民や牛馬六畜を取り食らい、掴み裂いていた。

其比、下野國のさかい奥州白川郡八溝山に岩嶽丸と云変化住て、人民をなやまし牛馬六畜をつかみさき、親兄弟妻や子を取れ、かなしむもの其かずを不知、依之宇都宮座主宗圓方より早馬を以、奥州八溝山、化生住て、國民をなやまし候、御退治被成、民の愁を為救可給と奉奏聞ければ、御門為驚せ玉ひて、誰ニか可被仰付と詮議有けれハ、公卿詮議有所ニ、
(『那須記』)

貞信が進み出て、「身不肖ながら某に被仰付候へ、罷下て化生を討亡して宸襟をやすめ奉らん」と申し上げた。早速に討伐の宣旨が下り、貞信は相模国に下向した。嫡子相模守の郎等には、伊豆源八義綱、高梨次郎隆法、大田四郎吉住、後藤次郎忠義、荏原三郎隆義をはじめとする二百余騎が付き従った。

天治二年(一一二五)十二月二日、貞信は郎等を引き連れて下野の地に到着、那須野を通り過ぎ、「八溝山」の

麓に陣を敷いた。けれども、岩嶽丸は見つからない。

途方にくれる貞信の前に、忽然と一人の老翁が現われた。翁は、化生の棲み処は山の北の嶽の半ばほど、「笹嶽」であると告げる。そして「暮目鎬矢」を貞信に与えると、「自分は太閤貴神である」と名乗って消えてしまった。

貞信公あきれておわします所に、老翁一人、忽然と顕れ出、汝か尋ぬる化生の者は、此山の北のたけの半程に、笹嶽と云所あり、山険く、岩石そはたち、鳥獸も通かたし、常に黒雲覆て、其内に光り出る也、是、岩嶽丸か住所也、我、氏子を取れ、無念に也、力と成て可討とて、暮目鎬矢を玉わり、猶行末守へし、我は太閤貴神也と化か如くに失玉ふ、貞信、奇異の思ひをなし、御跡三度礼拝有て、かふら矢を押し、き、化生を退治せん事必定也と、御喜ハかきりなし、

〔那須記〕

示現に任せて僅か三十余人が幽谷に下った。苔むした岩場や道なき道を辿り、峯に登っては雲間の松の梢にすがりつき、ようやく笹嶽と思しきあたりに到着した。黒雲が百重に覆い、足元も定かに見えなかったが、貞信が山王に祈るとたちどころに晴れ渡り、岩穴から悪鬼が現われた。

其時、貞信、虚空に向て手を合、南無三王大権現も化生の姿をあらはし給へと、拝給へは、有かたや、急黒雲天に立消ければ、岩穴の内より、悪鬼顕れ出、其形、口より吹出す息風は火あんのことく、十の手あしにて、磐石を引くつし、投ちらすハ、風に木の葉の飛ちることし、

(同右)

火炎のような息を吐き、磐石を飛び散らす岩嶽丸の姿は、那須が火山の地であることと関係していよう。「岩嶽」は荒ぶる火の山を擬人化した名称と思う。

暴虐極まりない悪鬼の前に、貞信は鎬矢をつがえると、見事にその首を射た。手負いの化生は貞信を掴んで天上しようとするが、力尽き、ずたずたに切られてしまう。この描写は『岩竹』と等しい。化け物の正体は、数千年を

経たかと思われる「蟹の化生」であった。

貞信御覽有て、件の鎬矢打つかひ、兵と射給へは、此矢走りて、あやまたす、悪鬼か首のほねにはつたと當りけれハ、化生ハいかりて、貞信を把て天にとらんとする所を、相模守馳寄て、丁と討、後藤かけ寄鬼を取て押へ、すき間もなく三刀指、残人々是を見て、我先にと馳集り、すたくに切たりける、つくく其姿をよく見れば、是必数千年を歴たる蟹の化生也と覺て、其長六尺余りにして、頭は牛の頭に似て、眉毛ハ白馬の尾をミたしたるか如し、其間より兩角天に生て、其長サ二尺斗、兩眼向にぬけ出る事、一尺余にして、金の鞆に朱を指たる如く、十の手足ハ四尺余、鉄のいかりの如し、前足二ツハはさみのことく、刀打違たるにことならず、毛生ける事、熊の如し、

〔那須記〕

資通が化け蟹の首を打つと、頭は酒呑童子よろしく飛び上がり、大榎の背後の古木に留まった。

資通、首打落給へは、其頭、天に飛上り、光を放て西を指て飛行すると見へしか、案内したる大榎大藏か背戸の古木に止りける、貞信追かけて首を打落給ひて、それより退陣有て彼首を櫃に入て都に登り給ひける、

〔那須記〕

貞信は都へ凱旋を果たし、下野国那須の守護を賜わり、以来、この地を一族が繼承することとなつた。これより那須藤権守貞信卿と申したが、後には那の一字を略し、須藤と名乗つた。貞信はすべて山王権現の利生と考え、山王二十一社を建立したという。

ところが、怪異は収まらなかつた。岩嶽丸の靈魂は大蛇と化し、毎夜、光物が飛び回り、里人に害を及ぼすようになったのである。人々が山王権現に祈ると、「此度、岩嶽丸か靈魂、一ツの毒蛇と成て、氏子をとらんとす、我、大猿と化して、夜々かれと戦也、やかて毒蛇を亡して、氏子安穩に可守、是より後は、岩嶽丸か靈魂を、社を立て

祭るへし」と託宣が下った。訴えを聞いた貞信により、大榎の地に建立された社は、八龍権現と崇められた。貞信は下野の神田に城を構え、那須家はこの地で栄えたとい¹⁶う。

先出『栃木県史』解題によれば、当地には完本・抜粋本を含め、『那須記』の写本が転々と存在している。岩嶽丸説話は『那須記』の冒頭を飾り、那須氏濫觴を語る重要な逸話であった。従って、必ずやこの武勇伝は書写者の目に触れたに相違ない。八溝山を境とする常陸・下野周辺に、今なお同話が浸透していることはその証左である。近代に入つてなお、那須与一和讃は、八溝山なる「笹嶽」の岩嶽丸討伐を歌い上げている。¹⁷

那須與一霊和讃

婦命頂礼那須郡、そもく那須家の濫觴は、藤原姓の太祖なる、大織冠の鎌足公、十と五代の長子にて、資家公と申するは、人皇七拾参代の、堀川帝の御時に、下野常陸陸奥に、三国境に名も高き、八溝山なる笹嶽に、住家をなして郷人を、苦しめなやめ横行し、榎諏訪彦かになすわひこと名付けたる、鬼とよばれし凶賊の、岩嶽丸を退治して、宸襟安んじ奉まつる、近国静謐成りければ、帝の賞与を賜わりて、下野国司任せられ、那須あがたの父と成り、従三位貞信公とゆう、後には須藤権守、福原城を築かれて、北岡邑を称えたり、(後略) (巻卷)

八溝山の岩嶽丸説話がいかに息長く語り伝えられていたか、『新編常陸国誌』「八溝山」の項も参照してみたい。本項には「修験住セリ」の証言とともに、須藤某が八溝山の奥、笹岳で龍蛇を退治したとある。八溝に住む異類異形の討伐譚が、近世の地誌にまで取り上げられていたことになる。

八溝山 夜美曾佐牟 補 水戸領地理志云、今久慈郡上野宮村ニアリ、山中至テ深陰、殊ニ連ル峯々多く、又八嶽八水ト云フアリ、(中略) 山水ノ清音、出塵離俗、神仙ノ境ト云ベシ、山上大悲閣アリ、坂東順礼ノ一ナリ、日輪寺、月輪寺ト云フ、両境アリ、修験住セリ、此祖ハ楠家ノ同族ニシテ、和田氏ナリトゾ、楠正成ノ書

アリ、其眞贋ハ余ニ於テ知ラズ、イツノ頃ヨリカ、光藏院勝莊院ト云テ、別當トナリシト云、今山上ニ二院アリテ、山下ニ一院アリ、合セテ三別當ト云、御朱印等モ賜ハレリ、此山八溝山ト名クル故ハ、八方ニ溪水流出シテ、西ハ那珂川ニ入り、東ハ久慈河ニ入ル、就中久慈河水源ハ、八溝ノ山北山南、數ヶ處ヨリ出ル故ニ、八溝山ト云、(中略)一説ニコノ山龍蛇蟄藏シテ、人民ヲ残害セリ、須藤權守某八溝山ノ奥笹岳ニテ平治セシヨシ、那須記ニ見ユ、今上野宮村ニ洞穴アリテ、蛇穴ト呼ブ坪名アリ、是レ毒蛇ノ蟄居セシ所ナリトモ云ヘリ、

〔新編常陸国誌〕卷六十一「山川」

那須近辺の地誌にも八溝の化生譚は頻出する。例えば栃木県那須郡教育会『那須郡誌』(一九二四年)は「下野国誌」「那須記」「烏山町天性寺記録」「那須家系譜」を引き、岩獄丸の難を注進に及んだ宇都宮宗圓や八溝の大榎大龍權現の縁起等について年代考証を試みている。⁽¹⁸⁾

八溝山は坂東三十三観音の第二十一番札所でもあった。明和八年(一七七二)刊『坂東三十三所観音霊場記』は、「第廿一番 常陸八溝」と題して、弘法大師による八溝山「大獄丸」退治譚を収録している。八溝の怪異譚の記憶は決して薄れることはなかつた証左であろう。

弘法大師、湯殿山ヨリ鹿嶋瀆ヘ趣玉フ時、此ノ八溝山ノ麓ニ至ツテ、大ヒナル溪河ヲ涉玉フ、(中略)土人ノ曰ク、我等愚昧ニシテ、溪河ノ奇特ハ不知ドモ、此ノ水上ニ一ノ高山アリ、巽ノ嶺ヲ高笹ト号ス、(中略)彼ノ高笹山ノ半腹ニ可畏鬼神住テ、或時ハ鬼形ヲ顕シ、或ル時ハ蛇身トモ化リ、又ハ婦人童子ト變ジテ、動スレバ人ヲ損害ス、土人は是ヲ号シテ、鬼賊大猛丸ト云、昔シハ山ヲ圍テ人家多シ、然ルニ彼ノ鬼神住テヨリ、自ラ人家モ離散シテ、終ニ怖畏ノ地ト成ルト、大師此ノ由ヲ聞玉ヒ、我レ今マ土人ノ為ニ、彼ノ鬼賊ノ怖畏ヲ除ント、直ニ高笹山ニ登リ玉フ、尔ニ霧雲山ヲ覆シ、頻ニ風雨震動シテ、更ニ東西モ辨ヘガタ

シ、時ニ大師虚空ニ向テ、般若ノ魔字品ヲ書玉ヘバ、忽チ雲晴風定ツテ、果シテ鬼神退没セリ、鬼神ノ住シ洞ニ自然ト蛇身ノ象アリ、土人は鱗岩ト称ス、干魘ノ時水ヲ注ハ、必ズ山ノ辺ニ雨降ル、俗ニ大師ノ法力ニテ大猛丸、岩ニ化ト云、斯テ大師絶頂ニ至リ、山ノ形ヲ見玉フニ、八葉ノ覆蓮花ノ谷峯ヨリ八箇ノ谷分レ、山水八方ハ流レ落ル、仍テ八溝ノ嶺ト号ス、(中略)我等此嶺ニ跡ヲ垂テ永ク師ガ佛法ヲ守護ベシ、一人ハ曰ク大巳貴、一人ハ曰ク事代主ト、各慇懃ニ告畢テ、一迅ノ風ニ消失玉フ、

(『坂東三十三所観音霊場記』)

同書は山頂に山王大権現と日光大権現が鎮座していたとも記すが、事実、八溝山頂にはこれらが祀られていた(『新編常陸国誌』ほか)。祭神は大巳貴尊と事代主である。だからこそ、『那須記』に於いて、山王権現への信仰篤い貞信は大巳貴尊から鎬矢を賜わり、山王権現は猿に化して岩獄丸の靈魂と戦ったのである。

○八溝ノ絶頂に両社アリ、一社ハ山王大権現 祭神ハ、事代主尊、今一社ハ日光大権現 祭神ハ、大巳貴尊、各大同年中ノ鎮座ナリ、(中略)

●巡礼詠歌 フミ迷フ、ヤミゾノ嶺ノ、雲ハレテ、月ノ光ヲ見ゾ嬉シキ、鬼神此ノ山下ニ住テ、久ク人ノ怖レ迷シヲ、弘法大師彼ノ魔障ヲ除キ、嶺ニ就テ道場ヲ発シ大悲救世者ヲ安置シテ、有信ノ為ニ結縁セシム、是レ夜陰ニ行人ノ雲晴月ノ光ヲ見如キノ、八溝ノ訓ヲ闇夜ノ詞ニ取ル、月ノ光ハ大悲ノ恵光ヲ指ナリ、若シ理解ニ依ラバ、愚人佛法ノ風縁ニ値テ、無明ノ雲ヲ吹晴セバ、唯心ノ月輪顯レテ、己身ノ浄土ヲ照スト乎。

(『坂東三十三所観音霊場記』)

同書所載の殺生石説話は、玄翁和尚が八溝の嶺の付まいに心を打たれて当地に留まっていたと伝える。本書末尾の記事は明和四年九月二日、他ならぬ著者自身が八溝山奥に分け入ったが、「春夏巡礼者の外、尋常ノ往来ナケレバ、熊笹一面ニ生茂リ」、悪天候に苛まれた。ひたすら祈ると、鉄砲の音が響いて来た。それを頼りに御堂に辿りつき、主に難儀を話すと、この嶺には人家などなく、まして殺生禁断の地で鉄砲の音などするはずがないと言う。さては

観音の利生かと、普門品を誦誦して夜を明かしたという。

実際、八溝山は熊笹に覆われた深山であった（『新編常陸国誌』）。『那須記』の岩嶽丸が「笹岳」にいたのは、極めて在地的な語りである。しかし、『岩竹』と『那須記』岩嶽丸との間には、一筋の道を辿ることができるように思われる。

四、

『岩竹』に比べ、『那須記』の内容は単純かつ在地的である。一読、両者の間にはかなりの距離があるようにも見える。化け蟹退治の時節からして『岩竹』は二月、『那須記』は十二月、物語の時代設定も全く異なっている。『那須記』には姫君の略奪もなく、ましてや九日並出の記事もない。

しかし、化生が修験の山深く潜む蟹「イワタケ」である点、単なる偶然の一致とは思われない。さらには、両者に共通する趣向として「鎬矢」に注目する必要がある。

『那須記』に神通の鎬矢が登場するのは、『田村の草子』の影響を受けた痕跡であろう。『田村の草子』は相伝の鎬矢により、化物退治を成し遂げる武勇譚であり、主人公である田村俊宗の出自を証明したのも、父の形見の鎬矢であった。那須家が稀代の弓の名手、与一宗隆の出自であつてみれば、その濫觴を語るに際し、鎬矢による討伐譚以上に相応しい説話はあり得ない。

『岩竹』もまた『酒呑童子』や『土蜘蛛の草紙』の要素を取り込み、同時に『田村の草子』からの影響も色濃く受けている。岩竹の首を討った靈刀「大竹丸」の名は、『田村の草子』に見える鈴鹿山の鬼神「おほたけ丸」の転

用である。¹⁹⁾或いは、天理図書館蔵『田村の草子』（寛永頃古活字版二冊）では、「おほたけ丸」退治の直前に大和国ならさか山の「りやうせん」討伐譚が語られるが、この化生は「かなつぶて」を得意とした。岩竹も鎧矢を身に受けた後、岩を掴んで討手に投げつけるが、こうした描写にも田村説話の投影が見られるのではなからうか。

大和国、ならさか山に、かなつぶてをうつ、りやうせんといふ、けしやうのもの出きて、都へ参るみつき物を、みちにてうはひ取、おほくの人の、命をたつ事、天下のなげきならずや、（中略）御はうのつふてほとこそなくとも、三代さうてんして持たる、鎧矢一すぢ、けんさんにいれては有へきとて、神通の鎧にて、射給ふに、りやうせんはうかみ、のほね、三寸のきて、なりわたる、

（『田村の草子』）

その時竹くちは、さすが名を得しつわものにて、二尺七寸の大竹丸といふ太刀にて切つてか、れば、岩竹も四尺に余りたる大はさみ振り立て、か、りけり、隙をあらせず一面に切つてか、れば、こらへずし、岩を掴んで投げにける、中つな進み出で、二人張に十二束取つて、からとうちつがひ、よつびいて射たりけり、八幡の利生にや、岩竹が心もとにすつぱと立つ、さしもにたけき岩竹も、敵はじとや思ひけん、山をさして逃げけるを、よしひろ追つかけて、逃すまじいといふま、に、落とし切りといふものに切つて落とせば、岩竹もさすがたけき者なれば、首は宙に飛び上がり、兜にむずとかぶりつく、打ち落とせども離れずし、刀と共に都へ持ちてゆかんとて、そのま、こそおきにける、残る四人の人々は岩竹が胴体をずんぐりに切り捨て、、洞の奥を見給へば、食い残したる人も有、掴み殺したばかりにて、重ねておきたる人もあり、

（『岩竹』）

看過してはならないのは、岩竹に致命傷を与えたのは太刀ではなく、神から授けられた鎧矢だったことである。この一点に於いて、『岩竹』は酒吞童子とは全く趣を異にする。挿絵には胴に矢を突き立てられた大蟹が描かれ、鎧矢こそが岩竹の敗色を決する。『田村の草子』の影響を見るべきであろう。関東以北に於ける田村伝説の流布に

ついでに、夙に堀一郎『我が国民間信仰史の研究』（創元社、一九五五年）に指摘された通りであるが、八溝の地もまた、田村伝承の深く根付いた場所であった。²⁰

鎬矢は本来、魔除けの力を持つ。『太平記』によれば、大森彦七の宝剣を奪おうとして、楠正成の亡霊が彦七のもとへ次々化け物を送り込む。寺蜘蛛が侵入した折には警護の者が睡魔に教われ、細い蜘蛛の糸で身動きを封じられたが、禅僧だけにはその呪縛はかからなかった。だが、とうとう不気味な女の首までも現われたため、人々はや「暮目」を射るしかないと決断した。

加様ノ化物ハ、暮目ノ聲ニ恐ルナリトテ、毎夜番衆ヲ居テ宿直暮目を射サセケレバ、虚空ニドツト笑聲毎度ニ天ヲ響シケリ、

〔太平記〕卷二十三「大森彦七ガ事」

暮目鎬矢がいかん辟邪の威力を発揮したか、御伽草子『大黒舞』なども右を踏まえ、主人公大悦の介の屋敷に盗賊が押し入った際、これを迎え撃つのに暮目を用いたのであった。

伊勢貞丈『四季草』は「神通の鎬」の典故に「田村草子」を挙げつつ、これは史実ではないと注意を促している。

神通の鎬の事

神通の鎬といふ物、神通巻と号して、羽のはぎ糸に紫糸を用ふ、（中略）神通の鎬の名ハ、田村草子に出たり、古き物語なれども、かやうの事は實事とは思はれず、（中略）鎬矢を貴び称美して、神通の鎬と書たるなるべし、大悲の弓、智慧の矢など、いふ類なるべし、

暮目の事

暮目の音ハ、暮の鳴ク聲に似たれば、暮目と云ふといふ説あり、用ふる事なかれ、（中略）又一説に昔シ妖鬼出て人をとり食ふ事ありしに、山中より大なる暮出て、かのばけ物を食ひ殺しけりよりてかの暮の目の形をう

つして、暮目を作り、妖怪を退る矢とするといふ説もあり、ともに用ふる事なかれ、(中略) 鳴ル音あるゆゑ、鳥獸是におどろき恐るゝなり、ばけ物のみ怖るゝにはあらず、又一説に暮目の音は、十二調子にはづれたる調子なるゆゑ、妖怪の類、是を恐るゝ、といふ説あり、是又用ふる事なかれ、

(「四季草」春上一)

「妖怪の類、是を恐るゝ、といふ説あり、是又用ふる事なかれ」、換言すれば、「用ふる事なかれ」と戒めねばならないほど、暮目鎗矢は妖怪退治に験いちしるきものと信じられていたことになる。

再び『岩竹』に目を転ずると、九日並出はあくまでも弓の説話として語られていることに気付く。『岩竹』は「塵滴問答」に反して梯子の設えを詳述せず、挿絵も射手の足場を描かない。これは『岩竹』が「のほりはしの由来」ではなく、弓箭の靈験譚として徹底されていることを意味していよう。『岩竹』『那須記』、いずれも神通の鎗矢が物語の要である。

また、『那須記』では、化生討伐に続いて後日談が語られた。化生退治の成功に続けて御代を寿ぐ祝言で閉じられる『酒呑童子』や『土ぐも』とは対照的である。『那須記』の後日談は、八溝と山王権現の靈験と起源を語ることに尽きる。なぜ、こうした後日談が必要だったのだろうか。

先に、『那須記』岩嶽丸伝承は在地的であると述べた。それは単に、本文中、那須地方ゆかりの実在の人名が記されているというだけではない。岩嶽丸説話の主眼の一つは、八溝の山王権現の靈験を説くことにある。従って、後日談には在地の神社仏閣の由来や、土地の記憶が盛り込まれた。こうした後日談を有するからこそ『那須記』の記事は在地的なのであり、岩嶽丸討伐場面で幕を引くことはできなかつたと考えられる。

翻って『岩竹』の場合はどうか。これも化生退治のみでは終わらず、かの日輪説話が後日談として加えられ、しかもそれは地名起源譚を兼ねる。『岩竹』の物語の構造は、岩嶽丸伝承と極めて類似している。

思うに、『岩竹』は坂東八溝の周辺に伝わる化け蟹討伐譚を換骨奪胎し、御伽草子に作られた作品だったのでないか。岩嶽丸説話は『那須記』に収載される以前から連綿と語り継がれ、八溝のみならず、栃木・茨城・福島にまたがる広範な地域に流布浸透していた。室町後期には、八溝山頂の山王権現は常陸佐竹氏らの外護を受け、近世には水戸徳川藩の領内となったが、この地に関心を寄せた光圀へ『那須記』が献上されたことは既述の通りである。領主の見聞に達するほど著名な岩嶽丸討伐譚が、『岩竹』作者の耳目に触れた可能性は否定できない。無論、八溝山の岩嶽丸に限らず、険峻な山岳地帯であれば、第三、第四のイワタケ伝承が伝えられていても不思議はない。『岩竹』がそのいずれかを取り込み、御伽草子に仕立てたとも考えられる。しかし、『岩竹』と岩嶽丸伝承との構造的類似性は、両者の密接な関連を思わせる。また、『岩竹』の姫君は春日明神の申し子であったが、那須一族は藤原氏の末裔であり、『那須記』には「藤ノ権守貞信卿 御紋藤ノ丸也」と記されている。『岩竹』所載の日輪説話も、弓の褒賞としての「坂東下賜」を語っており、本作が東国に縁ある御伽草子だったのではないかと推測を強める。

このように『岩竹』と岩嶽丸伝承とを比較検討してみると、両者の近似性が明らかになってくる。同時に、その決定的な差異も浮かび上がってくるように思う。

在地伝承を基とし、より幅広い読者層を対象とした御伽草子に作り上げるには、往々にして、限られた地域でのみ通用する事項ではなく、より遍く共有されている人名や地名、説話要素を用いようとする意識が働くであろう。例えば『酒呑童子』『土ぐも』『田村の草子』は、当時誰もが知る物語であり、いわば既に普遍性を帯びた説話要素である。或いは吉野山と八溝山はいずれも山伏の往来繁き修験の地であるが、八溝は必ずしも津々浦々に知られた霊山とは言い難い。かたや吉野は歴史的記憶が蓄積された周知の霊山、狂言の山伏までもが必ず駆け入り駆け出る

聖地であり、古く国栖伝承、土蜘蛛伝承をも伝える山であった。⁽²²⁾『岩竹』は岩嶽丸伝承を基に、吉野山を選び、周知の武勇伝を鏤めた。在地の由来を語る後日談を廃しただけでなく、新たに流布し始めた書物や知識に拠って、その跡へ地名起源譚を取り込んだ。この時、説話は在地の束縛から離れ、広い読者を持つ御伽草子へと変貌する。こうした転換を見て初めて、『岩竹』が御伽草子であることの意味も明らかになる。

武勇譚『岩竹』の享受層を考える時、武家は無論、例えば代々庄屋を勤め、『那須記』を著した大金氏のような在地の名家、それも男児を持つ家で歓迎されたいであろうことは想像に難くない。『岩竹』は物語末尾を「是を御らんする人々は、かりそめに女房よびける共、用心してよび候へと、昔もかやうの大事ありけるかと、思ひ出せよ人々、南無阿弥陀仏」と結び、女を呼び寄せる際の注意を促す。⁽²³⁾事の発端が入内途中の姫君略奪であることが存在するように、男児の誕生と成長を祝って武勇の御伽草子が作られたとすれば、『岩竹』もその一つに数え得る作品だったのではなからうか。

五、

最後に「蟹山伏」へと視線を戻してみたい。舞台上には似非山伏の痛快なる失敗、仕草の滑稽が繰り広げられる。しかし、室町から江戸にかけて、化け蟹退治譚が交錯する様を見渡した今、この狂言の興趣はそこに留まるものではないように思われてくる。なぜ、蟹と山伏なのか。

「蟹山伏」に於いては、化け蟹の出現場所は江州蟹が澤（虎寛本）や老の坂付近（鷲賢通本）であった。老の坂

はまさしく酒呑童子ゆかりの地である。山伏姿でありながら、散々に蟹に痛めつけられるその姿は、「山伏姿」に身をやつし、大江山で酒呑童子を討伐した頼光、山中の「土蜘蛛」を討ち果たした頼光その人を連想させよう。

謡曲「土蜘蛛」では、頼光と家臣独武者の二人が討伐に成功し、慶応本「土ぐも」や東京国立博物館本「土蜘蛛の草紙」では頼光と綱の二人が土蜘蛛を討つ。「俳諧類船集」の付合では、「頼光の御内の武者」に「独」、「頼光の物やみ」に「蜘蛛」、「山臥」に「酒典童子」「似せ物」、そして狂言からの影響であろう、「蟹」が挙げられている。頼光といえ、山伏、酒呑童子、土蜘蛛がただちに連想されたに相違ない。

狂言の山伏物は、「梟山伏」がそうであつたように、しばしば山伏と組み合わされた相手との間に何らかの関わりがある。狂言「蟹山伏」は、ささがにの土蜘蛛ならぬ蟹が化生として登場する。土蜘蛛が蟹であるならば、頼光主従は山伏と強力であろう。

岩嶽丸を退治した貞信に遠く及ばず、似非土ぐもに完敗してしまふ山伏と強力は、似非頼光をそこに見るような面白さを観客に与えたのではなかったか。

〔注〕

(1) 芳澤勝弘「白隠の蟹弘子図 狂言「蟹山伏」のこと」(『禅文化』二〇三号、二〇〇七年一月)、太田次男「大名・太郎冠者の変貌」(『史学』一九五七年七月号) 参照。民間伝承「蟹問答」は全国に広く流布しており(『日本昔話通観』)、化け蟹は禅僧に打ち負かされるなど、禅宗の色彩が濃い。石川県珠州市の蟹は禅僧に弘子で払われ、長野県では僧が如意で殴られる。仙北郡協和町の蟹の謎は「そもさん」で結ばれる。後出「太平記」大森彦七譚では、土蜘蛛の邪な力に対して禅僧だけは屈しない。国立歴史民俗博物館蔵『百鬼徒然袋』(日本一

美ふみ画)には古寺内に大蜘蛛の姿と、打ち捨てられた払子を描いた一図が載る。蜘蛛、蟹、古寺、禅僧というイメージの連環を窺わせる。

(2) 金井清光『天正狂言本全釈』(風間書房、一九八九年)参照。

(3) 『山口鷲流狂言資料集成』第一分冊(山口市教育委員会、二〇〇一年)所収。

(4) 『室町時代物語大成』第二所収。本稿の引用は大成により、通読の便を考えて適宜漢字を充てた。

(5) 『岩竹』には「夜半にも成ぬれば響きわたりて来たりける、まなこを見れば稲妻の秋の野に照るごとく、姿はせうわうしやくにして、口の広さ、たとへんは、竜宮世界に生まれける八大竜王も、これにはいかでまさるべし、取つて服せんといかる声、大海の高波に大風吹くがごとくなり、宵に集まる人々も、かのありさまを見るよりも近づく人はさらになし、されどもうきやう大臣はいたるところをづんと立ち、二尺七寸の釣鐘切といふ太刀を振つてか、り給ひけり、変化のものはこれを見て、掴んでゆかんとて中に飛びあがり、すでに取らんとしけれども、飛びちがへ討ちければ、変化のものはうちはずし、太刀を掴んで引きければ、やるまじと引かれる、そのせい強くして、太刀の先は二三寸折れてりやうへのきけるが、変化のものは薄手をい、あとをも見せず失せにける」とある。「うきやう大臣」とは耳慣れない言葉だが、或いは後述「右京大夫」と関わるか。

(6) 車返しは美濃国に実在の地名である。『不破郡史』(一九二七年)にいう。

車返しは今須村の中にして寝物語の東二町の所において、明治三十年頃迄はこの坂路を通りたれども、鉄道線路の出来てよりは道路変更してこの路は廢道となれり。此所の伝説は文明の頃二條良基が不破の関屋の荒れし板庇より洩る月を見んとて、車に乗りて此の坂まで来たりしに関屋の者どもが屋根の荒れたるが見苦しとて葺き換へし由を聞き、荒れたる所より月を見るこそ賞翫なれ、葺換へては興なしとて左の歌を

詠み京に引返へせりといふ。

ふきかへて月こそもらね板ひさしとくすみあらせ不破の関守

或は足利義教の来りし伝説なりといひ、又勅使を差遣されしなりといへども、何れも之れ付会の説なるべし。
(不破郡教育会「不破郡史」)

文化二年刊「木曾路名所図会」巻之二は「車返し坂」の挿絵を付し、関屋を後に、牛車が従者と共に引き返す場面を描き、図中に「撰政良基公 茸かへて月こそめれぬ板庇とくすみあらせ不破の関もり」を載せる。同書によれば、「車返坂」は近江美濃の国境にある長久寺の東二町に位置する「少しき坂」であった。

(7) 『未刊中世小説解題』(楽浪書院、一九四二年) 参照。日輪説話については、「一乗拾玉抄」巻一序品にも「一日中ノ三足ノ烏ノ事 俗典ニ此項見タリ、唐ノ五帝ノ中ノ堯ノ代ニ、日九ツ出テタリ、臣下八ツヲ射落ス、又三皇ノ中ノ黄帝ノ代ニ、日七ツ出ツ、六ヲ射落テ見レハ三足ノ烏有リ、其レヨリ初テ知ル之也」と見える。

(8) 『お伽草子百花繚乱』(笠間書院、二〇〇八年) 参照。また、渡辺守邦『仮名草子の基底』(勉誠社、一九八六年) 参照。

(9) 渡辺守邦「版本・ちんてき問答―翻刻と解題―」(『国文学研究資料館紀要』第九号、一九八三年三月) 参照。

(10) 春日大社の祭礼は二月と十一月に執り行われるが(『春日社記録』『日次紀事』ほか)、やはり「塵滴問答」との関係を考える必要がある。『岩竹』は物語に現実味を持たせるため、より細かい日時を設定したのか。

(11) 東京大学図書館蔵の版本『精進魚類物語』に「大蟹陰陽正」とある。『毛吹草』巻五に「糸桜さく瑞相かさかり蜘蛛」。蟹はしばしば笹と対で描かれ、語られた。後世、可児才蔵は青竹や笹を指物に用いたため、「さ、の才蔵」と呼ばれたという。後出「那須記」でも化け蟹は「笹獄」に住んでいた。

(12) 鈴木三郎『八溝山』(筑波書林、一九八六年)など参照。『統日本後紀』承和三年(八三六)条に、八溝黄金神の靈験で多量の黄金が採掘され、遣唐使の財源となった記事が見える。『山岳宗教史研究叢書17 修験道史料集「I」』東日本篇(名著出版、一九八三年)所収『八溝山日輪寺縁起』『八溝奥院山王日光阿社伝来』『八溝山八之峰』参照。河野守弘著『下野国誌』には「那須野路は浅茅色づく武夫の 八溝の山も霰ふるらし」(『下野歌枕』読人知らず)が載る。『下野歌枕』は守弘が日光、鹿沼、真岡の狂歌師と共に、下野の名所の和歌や狂歌を一般に募り、一七五首の歌集として編んだ書(竹末広美『日光の狂歌 二荒風体を詠む』(随想舎、二〇〇四年)参照)。『新編常陸国誌』巻百九「文苑」には八溝山について、次の詩文を載せる。

巖居稿 溝丘偉觀(八溝山跨)常野奥三州(山勢高峻、與筑波相)為伯仲、古木參天、岩石競奇、實為東方之壯觀云) 釋道澄

常陽鐘秀八溝山、高與筑波季孟間、老檜蒼松長巒密、攢峰峭壁巨躋攀、探奇曾命謝公屐、窮頂擬敲玉帝間、脚下彩雲飛片々、卻忘身已在人寰、

(13) 蓮見実・蓮見彊『増補那須郡誌』(小山田書店、一九八八年)参照。

(14) 彰考館には延宝四年序の十五巻本と、慶長奥書を有する写本、以上二点の『那須記』が蔵され(彰考館蔵書目録)および国文学研究資料館マイクロフィルム)、いずれも『国書総目録』に未載。慶長本は岩嶽丸説話を載せない。以下に十五巻本奥書を示しておく。

儂雖作此書、無知短才也、故文字胡乱一部卷篇不正以收納數年文篇、昔日隱勇士譽、虫之虫喰恨今年八庚寅中夏初而他方出、此書之中諸大将并勇士充文等雖有少之、一字一点不直其本文表也、其以所ハ舊充文ハ其子孫傳起請縁記者、當国之神社佛閣收籠之彼文無違書写者也、天智十年大伴之乱依至朱鳥保元迄、近比

永祿天正慶長年中記九百二十余年、有譽勇士關東之名跡宣言語讒古傳雖有疑多難信、其中撰記實有多我五代祖對馬守重頼為書跡定延宝元春重頼末孫七右衛門重供一男文左衛門重貞那須記十五卷作

延宝四年丙辰三月

(15) 藤權守始那須領地頭職之事

竊に史論の中をかにか見るに、世を治る人ハ亂に先達て賢政を學ひ、天下を亂さん者ハ、治邦にのそみて暴悪を好む、茲下野國那須々藤の家の治亂を尋るに(中略)、藤權守貞信卿御紋藤丸と申ける(中略)、源左馬頭義朝為郎等、武威諸國にふるい、かたを並る人もなし、其比、下野國のさかい奥州白川郡八溝山に、岩嶽丸と云変化住て、人民をなやまし、牛馬六畜をつかみさき、親兄弟妻や子を取れ、かなしむもの其かすを不知、依之宇都宮座主宗圓方より早馬を以、奥州八溝山化生住て、國民をなやまし候、御退治被成民の愁を為救可給と奉奏聞ければ、御門為驚玉ひて、誰ニか可被仰付と詮議有けれハ、公卿詮議有所ニ、(中略)是等を始として、其勢武百余騎、天治二年十二月二日、相模國打立て、下野國に下着ましくける、那須野を歴て八溝山のおもとに御陣取せ給ひて、せこを集給ひける、馳集る所の者にハ、須左木、須賀川蛇穴、礮上五百余人也、中にも蛇穴次郎大榎大藏あらひ出され、為案内者八溝の嶽に責上り、四方を取廻し谷峯無隙狩給へと、化生と覺敷者更に見へさりけり、(中略)扱其後、大勢にてはかのふましと、其勢わつか三十余人、幽谷に下てハ苔岩の細路を傳へ、峯に登てハ雲間の松の梢にすかり付、漸谷に下り、此そ笹嶽と覺敷処に近付て見給へは、如案黒雲百疊に覆て、岩穴けんなんのわかちも更に見へす、(中略)資通、首打落給へは、其頭天に飛上り、光を放て西を指て飛行すると見へしか、案内したる大榎大藏か背戸の古木に止りける、貞信追かけて、首を打落給ひて、それより、退陣有て、彼首を櫃に入て、都に登り給ひける、

御門をひらんと有て、此度の忠賞にハ、下野國那須の守護を給わるとの宣旨也、貞信、有難しと、御前を罷立、其勢式百余騎を引率して、下野國那須郡に下着御座ける、是、那須藤権守貞信卿と申ける、其後、那ノ字を畧して、須藤とこそ名乗ける、是亦三王権現の御利生也とて、三王廿一社を御建立御座ける、去程に、大榎大藏か背戸の古木に留りし鬼の靈魂、化して一ツの大蛇となり、里人を取らんと、夜々光物飛行する事、かきりなし、里人大におとろき、三王権現に御湯をに奉りければ、忝も神靈乙女に乗せ給ひて、託宣有けるハ、此度、岩嶽丸か靈魂、一ツの毒蛇と成て、氏子をとらんとす、我、大猿と化して、夜々かれと戦也、やかて毒蛇を亡して、氏子安穩に可守、是より後ハ、岩嶽丸か靈魂を、社を立て祭るへしと、神はあからせ給いけり、里人驚き、いそぎ貞信卿に件のよしを申上る、貞信、神託聞召、有難と、大榎に社を御建立ましまして、祭礼を寄附有て、社主を付給ひける、是を八龍権現と崇め給ひけり、(『那須記』)

(16) 神田城は、栃木県那須郡教育会『那須郡誌』第六章、城址「一、神田城址」に貞信の岩嶽丸退治の説話を記し、「鎌倉時代の故城址にして、高さ三間基底巾六間堤上巾一間の土塁を築き、土廓内東西三十五間、南北六十六間、東面には大手門、南面には搦手門の址と思はる、切り開かれたる地点を存し、口碑に唐犁一枚の幅まで塹壕を掘り下げたりと称するものは、唯だ其の壘壕の深きを形容するに過ぎざるべしといふ」とある。権現について諸書に記録がある。『創垂可継』一四卷七「大多羅村大藏」は「大治二年、八溝山高笹の山領に住む岩岳丸、一に笹嶽丸と言う鬼神須藤権頭退治し首を打ち落せしに、其の首虚空に飛び登りて彼の大藏が裏山に落ちし故其処に社を建て大頭竜権現と崇む」という。

(17) 『那須与一の歴史・民俗的調査研究』(栃木県立博物館、一九九一年)参照。八溝近辺では先祖が岩嶽丸討伐に従った経緯を踏まえ、今も門松を飾らないなどの家例がある。以下、『創垂可継』一四卷八・九「村々由緒

の事」より抜粋しておく。

先祖常盤大学と言ひしは須藤権頭八溝笹岳丸退治の時抜群の手柄ありしに依つて権頭より式尺八寸広国の刀賜うなり。今以つて所持す。
〔時庭村佐市と笹岳丸〕

大治年中須藤権頭八溝山笹岳丸退治下向の時、重兵衛先祖治郎右衛門といえるもの山の案内す。極月より正月迄掛りし故妻子松を飾るのいとまなく家の内に松巻本立て置き正月を祝ひしに笹岳丸亡し故にや其の年より悪風もなく諸作よくとりしかばこれを吉例として今以つて松を飾らずと云う。

〔大豆田村十兵衛と仏応禪師〕

此の者先祖は益子氏にて源藏と云う。須藤権頭八溝山笹岳丸退治に赴くの時源藏守り本尊薬師へ立願しに、事故なく退治せしに依つて彼の薬師堂を建立せしと言ひ伝う。
〔同村源藏と薬師堂〕

須賀川上組如来伊賀兵衛、大治二年須藤権頭奥州八溝山中高笹といえる所に住む鬼形笹(岩)岳丸退治登山の時、伊賀兵衛先祖平久江伊賀山の案内し、事故なく誅戮し帰陣の時伊賀宅に止宿せしは十二月晦日のことなりしかば、伊賀家内の者権頭旅宿のいとまみにて越年の用意とり賄にいとまなく、あり合わせの雑飯にて元日を祝ししと云う。其の吉例を引き今にこれを家例にすと云う。私(増業)に曰く。彼の笹獄丸鬼形と云い伝われどもいにしい大江山の酒吞童子の類にして強賊の名を得し者に有りしならん。

〔如来伊賀兵衛と元日雑飯の家例〕

大治二年須藤権頭八溝山の笹岳丸誅戮十二月晦日河内宅に旅宿をてんせらる。伊賀が如く越年の支度取営むにいとまなく松さい飾らざりしかば是れを吉例として今に門松を飾らず有り合わせの食事にて元旦を祝うと云う。其の時権頭より矢一午を給わるに依つて己が定紋と丸の内に二つ矢羽を定紋とすと云い伝う。

〔須賀川上組兵衛門と正月松飾り家例〕

八溝山常陸・下野・奥陸三か国の境なり。八峯、八谷、五滝、三水、三池の景あり。八峯は、雲蒼岱、今山王岳と云う、則ち三国の境い地にして山王権現、日光権現の宮地なり。水府公御代の御建立なり。一の華表（とり居）は御当家代々御建立なり。奥州一百座の内、白川郡七座の内と延喜式にありと云う。（中略）
 窮穹嶺。今高笹岳と云う。此の山往昔、悪鬼岩岳丸の住せし所にて須藤権頭退治せしと云う。

〔八溝八峯八谷〕

明治初年の記事を掲載する「那須系図Ⅰ」（弘前市 那須隆蔵）も八溝の凶賊退治を録して、「貞信 須藤權守始領那須郡 初名資家、領讚岐国神田後在洛堀川帝長治二年奥州白河郡八溝山有凶族、國中衆民苦之帝患之撰可其能退治凶賊者則命資家受勅、辞鳳關率嫡子太郎資通及郎從伊豆源八義綱、高梨次郎高範、大田四郎吉任、後藤次郎忠義等、数百人到奥州、即時滅之焯而奏之、帝善其功蒙可以先祖忠平諡為汝名之命迺改貞信、且為褒賞叙從三位賜下野国那須郡始下向矣、以是称須藤也」と伝える。「那須郡誌」は那珂村大字浄法寺の本尊につき、長治二年、貞信が護持仏の大日如来の利益で八溝山の怪賊討滅を果たし、那須郡に莊園を下賜されたと述べ、「覚峻上人の高弟頼喰僧正を紀伊の高野山に遣し、大日如来の尊像を請ひて堂宇芝山の里といふ所に勧請し、堂宇を建立して那須氏の鎮護となせり」「該堂の棟札に『漆千盃、朱千盃、金子千盃、朝日指ス、夕日暉ク』と。蓋し造営に善美を尽せしを称するなり」と云う。「烏山町天性寺文書」の「洞明神縁由」も權守藤原資家が八溝山の凶賊を滅ぼして貞信と改名、下野国那須郡を領したと伝える。当地では今なお、岩嶽丸退治を題材とする太鼓芸能が行われるなど、在地伝承の生命力の強さを改めて思わせる。ほかに『下野伝説集』6所収「八溝の岩嶽丸」（栃木県連合教育会、一九七〇年）、『那須町誌』（那須町誌編さん委員会、一九七六

年)、『黒羽町誌』(黒羽町、一九八二年)第三編拾遺・第五章民話民謡(三)「八溝の岩岳丸と頭沢大明神」、阿久津正二『八溝今昔』(黒羽町教育委員会、二〇〇五年)など参照。

(18) 同書は「頼時の乱は我が国の大難にして、永承六年に兆し、石山宗圓座主は頼時調伏祈禱の勅命を奉じて、天喜二年下野に下向(下野国誌)せしを見れば、或は八溝山に住める岩嶽丸なるものは頼時の乱に関係ある賊徒にはあらざるか。岩嶽丸の籠れる笹嶽と称する所は、現に八溝山中に存し、山砦の形をなして賊徒の籠れるを推知するに難からず。且山中「那須柔場」やなほ、「御殿場平」ごてんばな、「弓落」ゆりおち、「鎧石」等の地名存すに徴しても、益々其の事実なるを知るに足らむ。依つて権守貞信は、天喜年間より長治年間(此の間五十二年あり)に於て、八溝山に籠れる賊徒を平定し、其の功によりて莊園を那須郡に賜はり、子孫繁榮して那須氏を称せりと断すべし」と説く。『下野国誌』九之巻「古城盛衰」には、「宗圓(中略)源ノ頼義朝臣、奥州ノ逆徒安倍ノ頼時征討之刻、為_三調伏祈禱_二下_三向當國_二ニ、于_レ時天喜二年甲午八月生年廿二歳云々、康平六年癸卯二月被補下野ノ國ノ守護職ニ、以舍弟兼仲ノ男宗綱ニ、為_二猶子ト_一相續云々、日光山歴代記に、第十一世座主宗圓、治三年、鳥羽院永久元年八月補任云々、記したり、さて永久元年八宗圓没年の三年後なり、いかゞ、よく考ふべし」とある。

(19) 注(7)の文献参照。

(20) 『那須郡誌』須賀川村の由来、同書第四章第一節「那須氏の盛衰」第九章「二、境村八幡神社」第十章「一八、向田瀧寺」など田村伝説が頻出する。第九章「五、那須神社」には「征夷大將軍坂上田村麿、征夷の途次此地を過り、応仁天皇を祀りて、金丸八幡宮と称し、明治維新の際、那須神社と改むる由刻したれども、疑なき能はず」ともいう。

(21) 佐竹氏は八溝山麓に鎮座する近津神社の保護者でもあった。『常陸紀行』は「八溝山に妖鬼ありて常に陰雲

晦冥籠も雲霧濃々として黒暗なりしゆへに、黒沢と呼となり、(中略)此妖怪を近津神退治し給ひしより、今に近津宮に神宝となりて爪牙など存せり」と伝える。『新編常陸国誌』は八溝の社に所蔵される「右京大夫」寄進状を掲載する。

△日光権現▽八溝山上ニアリ、神殿板葺、長九尺、妻六尺五寸、神龕ハ幣ナリ、殿内ニ山王権現アリ、本尊釈迦金佛ニテ、長四寸六分ノ座像ナリ、鳥居高一丈三尺、横一丈二尺五寸、朱印地七石、山内ニ愛宕社、熊野社、辨財天社、妙見社アリ、何モ小社ニテ、神龕ハ幣ナリ、本社所蔵文書ニ、依神之保黒澤矢田ノ内、六百五十貫文ノ所、近津へ寄進之目録如件、永正十一年甲戌六月廿三日、右京大夫〔花押〕トアリ、

(卷五十五「上野宮」)

右の右京大夫とは常陸佐竹氏の第十六代義舜であろう。佐竹氏は義舜から右京大夫を名乗り、保延年間(一一三五―一一四一年)、初めて常陸国久慈郡佐竹郷を領し、慶長七年(一六〇二)に国替えとなるまで常陸一带を中心に勢力を誇った。右京大夫寄進状は近津義任氏の所蔵文書に現存、研究の余地があるとされるが、『茨城県史料』中世編Ⅱ(一九七四年)や『大子町史』資料編上巻(一九八四年)に所収。

依神之保黒沢、矢田野内六百五拾貫文之所、近津江寄進之目録如件、

永正十一年 甲戌 六月廿三日

右京大夫(花押影)

『岩竹』に於いて化け物に斬りつけたのは「右京大臣」であった。『岩竹』が孤本である現在、誤記とも著者の曖昧な知識の反映とも判断できないが、在地の右京大夫の記憶が遠く『岩竹』「右京大臣」に流れ込んだ可能性も考えられようか。

(22) 『岩竹』の舞台が吉野山であるのは、土蜘蛛伝説との関係によるか。

(23) 八溝周辺には早く浄土教が広まっていた(『大子町史』通史編上巻、一九八八年)など参照。

(24) 拙稿「梟山伏攷」(『成城国文学』第十八号、二〇〇二年三月)、「梟の懸想文―越後米山薬師のこと―」(『説話論集』第十一集所収、清文堂出版、二〇〇二年)など参照。

〔付記〕

『岩竹』の閲覧に際しては、岩瀬文庫の林知左子氏より格別の御高配を賜りました。心より御礼申し上げます。